



## 腹腔鏡下手術について

腹腔鏡下手術という言葉聞いたことはありませんか？

この手術は、従来の方法と違ってお腹を大きく切ってそこから中をのぞき込むのではなく直径1cmほどの腹腔鏡という、先端にCCDカメラのついた器具を、一般的には炭酸ガスでふくらめたおなかの中に挿入して中の様子をモニターテレビに映し出し、その画面を見ながら手術を行う方法です。狭いところや直接見えないところも拡大して見ることができます。腹腔鏡の入っている所と違う3-4カ所に5-10mmの筒（トロッカーといいます）を取り付け、ここから細いマジックハンドのような鉗子を何本か挿入して手術を行います。

日本では1990年頃より、まず胆嚢摘出術からこの方法が使われるようになりました。現在はお腹の中の臓器はほとんどこの方法で手術ができるようになってきています。

腹腔鏡下胆嚢摘出術は標準術式として多くの病院で行われていますが、それ以外は専門施設で行われることが多いようです。

この腹腔鏡下手術は、腹腔鏡を入れる穴のほかに3-4個の小さな穴から鉗子を入れる創だけですみますので傷跡が小さく、痛みも最小限ですみます。したがって体も早くから動かすことができます。またお腹の中の腸などが長い時間空気に触れず、また手で触ったりせずに手術ができますので、術後の回復が早く、問題なければ普通より早く食事ができます。

ということは退院までの時間を短縮できるということです。さらには創への癒着による腸閉塞なども起こりにくいわけです。

ところが、いいことばかりではありません。某

大学病院でのニュースが皆さんの記憶に残っているかもしれませんが、無理にこの手術をいたしますと思わぬ事故が起こります。手術は直視下ではなく、モニターテレビの中だけの限られた範囲で行われますので、死角があります。電気メスなどで見えないところの臓器を損傷してしまうことがあり、気づかないまま手術を終えてしまうことがあります。

また直接手で触っているわけでは有りませんので、大切な触感が使えません。技術的には難しい手術で、安全に行うための準備・トレーニングが必要と考えられます。

しかし安全性を確保して行われれば、新しい技術によりもたらされるメリットは非常に大きく、手術の常識を徐々に変えていくことができる方法なのです。患者さんにとって一番いい方法を提供できるように我々は日々努力をして参ります。

【広報おかや1月号掲載】

